

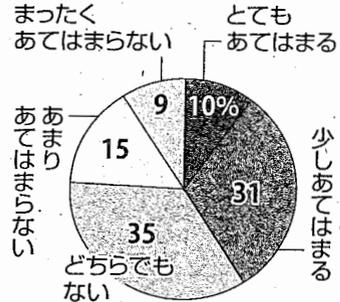
コロナ「大変だった」60%

淑徳大読売 ③

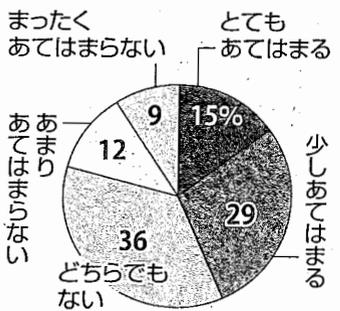
共同千葉県調査

「淑徳大学・読売新聞共同千葉県調査」では、県民にコロナ禍を振り返ってもらった。調査に応じた人の60%が「大変だった」と答える一方、コロナ禍でも人とかわることが

※小数点以下は四捨五入。合計は必ずしも「100」にならない



「コロナ禍でも良いことがあった」



「コロナ禍でも相談できる人がいた」

できたとして、前向きに捉える人が多いこともわかった。

新型コロナウイルスを巡り、2020年4月に初の緊急事態宣言が出されてから、23年5月に感染症法上の分類が5類に引き下げられるまでの約3年間、県民は先行きの見えない日々を送った。「コロナ禍は大変だったか」との質問に「とてもあてはまる」

交流絶えず 前向きな声も

が25・1%、「少しあてはまる」は35・2%で、計60・3%が「大変だった」と感じていた。「コロナ禍は我慢が多かったか」との質問には、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」が計52・4%だった。「とてもあてはまる」に限定すると、20代は26・7%だったが、年代が上がるにつれて比率は低下。60代は13・1%で、20代の半分だった。

調査に携わった淑徳大人文学部の永房典之教授は、「エイジング・パラドックス（老いの逆説）」という現象の現れだともみている。高齢者が否定的な現実にあっても、限られた人生の残り時間を意識し、より意味のある活動や人間関係を深め、前向きに生きようとすることを示しているという。

全体の回答に戻ると、「コロナ禍では心配な気持ちが強かったか」との質問に「あてはまる」は46・8%、「コロナ禍で家にとじこもりがちになったか」との質問に「あてはまる」は45・6%で、いずれも半数近くを占めた。この反面、一定の人間関係が維持されていたこともうかがえる。「コロナ禍でも良いことがあったか」との質問には、「とてもあてはまる」が10・4%、「少しあてはまる」が31・4%で、計41・8%が肯定的に受け止めた。「コロナ禍でも人とかわることができたか」との質問には、「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」で計51・1%を占めた。「コロナ禍ではひとりぼっちだと感じたか」との質問に「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」は計48・7%。「コロナ禍で相談できる人がいたか」との質問には、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」が計43・8%だった。